

〈書 評〉

森 健躬（東京厚生年金病院整形外科）著

頸診療マニュアル

大井淑雄（自治医科大学）

この本の前書きに、われわれ医師に限らず技術者という人種には、解決の簡単な問題を軽蔑し、高度な知識と技術が要求されるような問題には、一転して熱心になるという特性があり、単なる肩こりのような患者をないがしろにし、頸髄症を伴うような患者には、なみなみならぬ興味を示すことになると記されている。この言葉は私にとってもたいへん教訓的である。最近の脊髄外科の発達により、以前とは考えられないほど高度な

手術が行われるようになり、我々の興味も頸髄症があるような重症の患者に集中しがちである。しかし頸部痛で受診する患者のうち、手術の適応となる患者はほんの少数であり、大部分は寝違いとか、筋肉の疲労とか、肩こりとかであることがほとんどである。本書では、こういう大部分の患者の病因の考え方や、治療の進め方について日常の臨床に即して、ていねいな説明がしてあり、他の少数の手術加療が必要となるような患者の

みの治療方法を事細かに記述してあるような本と異なる点である。また精神的なストレスによるものや、うつ病や、心因性による頸部痛の鑑別診断のポイントがまず始めに述べられているのも、この本が実際のなものであることをよく示している。

この様な本が書けるのも著者の臨床経験が非常に豊富であり、肩こりの患者でも寝違いの患者でも、ていねいに病態を把握し治療する姿勢があるからであろう。他の医者が、彼のノウハウをこの本より得ることは非常に有意義であると私は考える。

（A 5, 頁 146, ¥2,500, 医歯薬出版 刊）